

北海道近現代史研究会・第二回現地視察補足レポート

釧路市を再訪して

正 木 浩 司

はじめに

公益社団法人北海道地方自治研究所の設置する「北海道近現代史研究会」^①は、二〇二三年二月八日、釧路市を対象とする現地視察を実施した。

同研究会では二〇二一年一〇月に実施した第三回現地視察で釧路地域を巡察しており、その際に釧路市にも立ち寄っているが、同市阿寒町は一定の時間をかけて巡れたものの、市中心部^③については、時間の都合上、数カ所の施設に足早に立ち寄るにとどまったことから、市中心部に関する視察のレポート執筆は再訪の機会を待つこととして先送りしていた。そうした経緯を受けての実施となった今回の釧路市再訪は、実施時期としては第六回現地視察（二〇二二年一二月、胆振）に次ぐが、研究会の活動上の位置づけとしては第三回現地視察の補足視察ということになる。

今回の視察は、別用務で筆者が釧路市を訪れる機会を捉えて実施したため、研究会メンバー数人が参加したこれまでの現地視察と異なり、筆者一人での実施となった。とはいえ、今回に限っては、釧路市に長年暮らす元北海道議会議員の岩崎守男さんにガイド役をお引き受けいただいたことから、市内の主要な史跡や施設を朝から夕方までの長時間にわたって同行・案内していただく幸運に恵まれた。

今次視察の大枠のテーマとして想定したのは、市内の南大通周辺地区等に史跡が残る近世期の場所請負制度や、鳥取地区等に史跡・資料館が残る明治期以降の土族開拓など、釧路市の歴史に深く関わる特徴的な情報の収集を通じて、釧路市の発祥とその後の行政体制の変遷を把握すること、さらに、炭鉱、鉄道、漁業といった産業史についても可能な限り情報を収集することである。

本稿はこの第三回現地視察の補足視察について

概括的に報告することを目的としている。

1. 「釧路発祥の地」の痕跡を求めて

当日朝、ガイド役の岩崎さんとは、筆者が宿泊していたホテルの前に午前一〇時に待ち合わせ。予定の時間どおりに合流し、岩崎さん運転の車で早速、最初の目的地へ向かい走り始めた。

この日最初に向かう視察先は、事前に筆者からリクエストを出していた。釧路川に架かる幣舞橋の南側、橋南地区などと呼ばれるエリアである。JR釧路駅南口から南に幣舞橋へ向かう「北大通」は、同橋を渡ってすぐに位置する幣舞ロータリーを起点として網走市へ向かう国道三九一号に含まれ、そのスタートに位置する直線道路である。同ロータリーから南西方向に伸びる道道二五号、別名「南大通」は、総延長一二kmほどとはいえ、「大通」とあることからもうかがえるように、この道

<付表1> 第3回現地視察および補足視察の主な視察先

第3回現地視察（2021年10月13日～16日実施）で釧路市を訪れたときの視察先（阿寒以外）

| | 史跡・施設名 | 所在地 |
|---|-----------------------|-----------------------|
| 1 | 鳥取百年館 | 釧路市鳥取大通4丁目2-18 鳥取神社境内 |
| 2 | 釧路市水産資料展示室 マリン・トボスクしろ | 釧路市浜町3-18 しろ水産センター3階 |
| 3 | 釧路國一之宮 厳島神社 | 釧路市米町1丁目3-18 |
| 4 | 釧路市立博物館 | 釧路市春湖台1-7 |

補足視察（2023年2月18日）

| | 史跡・施設名 | 所在地 |
|----|------------------|-----------------------|
| 1 | 米町公園 | 釧路市米町1丁目2 |
| 2 | 【再訪】 釧路國一之宮 厳島神社 | 釧路市米町1丁目3-18 |
| 3 | 久寿里会所の跡碑&佐野氏紀功碑 | 釧路市南大通8丁目2 佐野碑園内 |
| 4 | 太平洋戦争強制労働犠牲者慰霊碑 | 釧路市紫雲台1 紫雲台墓地内 |
| 5 | 旧太平洋炭礦 炭鉱展示館 | 釧路市桜ヶ岡3丁目1-16 |
| 6 | 【再訪】 釧路市立博物館 | 釧路市春湖台1-7 |
| 7 | 釧路市・鳥取町合併記念碑 | 釧路市鳥取大通1丁目6 鳥取5号公園内 |
| 8 | 鳥取県土族移住之地碑 | 釧路市鳥取大通9丁目4-1 |
| 9 | 【再訪】 鳥取百年館 | 釧路市鳥取大通4丁目2-18 鳥取神社境内 |
| 10 | 日本釧路種像 | 釧路市大葉毛5丁目7 |

の界限がかつての釧路の中心部であった。「釧路発祥の地」の痕跡を求めて、今回ここを最初に訪れることにしていた。

ロータリーを越え、南大通に入ると、そのまま西進して米町地区へ。最初に、灯台型の展望台が印象的な「米町公園」（釧路市米町一丁目）に立ち寄り、園内の数基の碑を視察しつつ、市の中心

部から西部方面へのパノラマを眺望した。その後、足早に同公園に隣接する「釧路國一之宮 厳島神社」の再訪を経て、林立する多数の仏教寺院の隙間を縫うように地区内を巡り、「佐野碑園」（釧路市南大通八丁目）という公園に向かった。この公園こそ、筆者がこの界限で最も視察を切望していたところである。

佐野碑園の敷地内にもいくつかの碑が集められている。今回特に視察を切望していたのは以下の二つである。

一つは「久寿里会所の跡碑」である。久寿里はクスリと読む。市編纂の「釧路市統合年表（二〇〇六年）によると、文献上、「クスリ」という地名が現れるのは一六四三（寛永二〇）年、「オランダ船カストリクム号のアクセシ（厚岸）漂着に際し、クスリ在住のアイヌが交易目的で厚岸を訪れた」という記述が初出という。クスリは、釧路の語源とされるいくつかのアイヌ語の一つである^④。

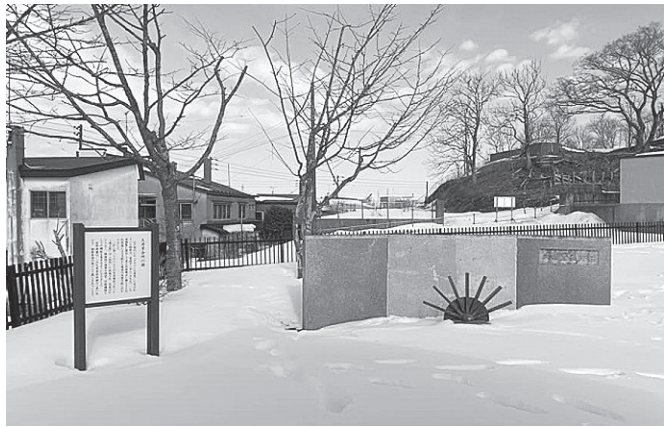
同統合年表を辿っていくと、一八世紀半ば以降では「クスリ場所」の文言も現れるようになり、松前藩の蝦夷地統治のもと、この地が場所請負制度における場所の一つとしてあったことが読み取れる。場所請負制度とは、松前藩独自の知行制度である商場知行制から変質したもので、各商場を知行地とする同藩家臣がアイヌ民族との交易

権の行使を特定の商人に請け負わせるものである。場所請負制度は不公平取引の側面を強めながら、その後さらに変質し、アイヌ民族は交易相手ではなく労働力として使役される立場に追い込まれていくことになる^⑤。

クスリ場所は、西のシラスカ場所、南東のアツケシ場所、東のネモロ場所、北のシャリ場所と、それぞれ境界を接していた^⑥。各場所は第一次幕府直轄期（一七九九～一八二一年）にいったん廃止されるが、松前藩の復讐（一八二一年）に先立って一八一三（文化一〇）年から再開され、「漁場持」制度への改定（一八七〇／明治三年）を経て、一八七六（明治九）年まで継続されることになる。この間、松前藩がこの地に設置していた「運上屋」は、幕領化にあたって「会所」に改名され、幕領期終了後もその名のまま継続されている^⑧。その跡地に現在の佐野碑園が整備されていることを「久寿里会所の跡碑」は示している。

釧路場所の請負商人としては、前出の統合年表からは、岐阜出身の飛騨屋・武川久兵衛や、新潟出身の廻船業者である米屋孫右衛門のほか、数人の名が読み取れる。幕府直轄化に伴う廃止を経て一八一三（文化一〇）年に再開されたクスリ場所は、一八二二（文政五）年より二代目米屋孫右衛門が請け負い、一八五五（安政二）年に三代目からこれを継承した四代目（米屋喜与作）は、一八六六（慶応二）年に改姓して佐野姓を名乗った。佐野碑園の名はこの佐野孫右衛門に由来する。

佐野碑園での視察を切望していた碑のもう一つは、園名の由来とされる佐野孫右衛門を顕彰するために建立された「佐野氏紀功碑」である。現地の解説によると、同碑は「江戸時代末期から明治初めまで久寿里場所の請負人（漁場持）として釧路地方の開発にあたった佐野孫右衛門の功績を顕彰したもの」で、「佐野家は、寛政年間に新潟県から釧路に移り、代々場所請負人を任じられ」、「四代目に当たる孫右衛門は昆布漁業振興のほか自費による道路開削や川湯の硫黄採掘事業も行い、釧路地方の発展に特に貢献」と説明されている。



久寿里会所の跡碑

なお、前出の厳島神社の由緒にも、一八〇五（文化二）年における神殿建立者として、初代と思しき米屋孫右衛門の名が登場し、その後の社周辺地域の発展の礎を築いたことなどが明記されている。クスリ（久寿里）が正式に「釧路」と表記されるようになるのは、一八六九（明治二）年以降という。¹⁰同年八月の「北海道」設置にあたっては、国郡制の適用のもと、北海道内一國の一つとして釧路国が、釧路国七郡の一つとして釧路郡が設置されている。アイヌ民族の要地の一つであったクスリは、近世期におけるクスリ場所としての活



佐野氏紀功碑

況や幕府直轄期の行政・交通の拠点としての繁栄などを足がかりに発展を始め、明治期以降にこの地で本格化する行政機構や港湾の整備の進展とともに、今日の釧路市を形成していく舞台となった。その後の行政体制の展開については後段であらためて辿りたい。

2. 紫雲台墓地へ、強制労働犠牲者の慰霊碑を視察

佐野碑園を去ると、橋南地区を東へ一気に走り抜け、春採湖の南側、市営「紫雲台墓地」（釧路市紫雲台一）へと向かった。その敷地内の一角には「太平洋戦争強制労働犠牲者慰霊碑」が建立されている。同碑の前で行われる慰霊祭の継続的な実施には岩崎さんも長年関わってきた経過があるとのことで、今回案内していただいた。強制労働の史実に、釧路でも行き当たることになった。

北海道開拓における強制労働の問題は、当研究会も特に関心を寄せてきたテーマの一つである。これまでの現地視察を通じて、強制労働の始まりである明治期の「囚人労働」と、囚人労働の廃止後、その後を継承した「タコ労働」については、第二回視察で訪れた北見市や網走市、第四回視察で訪れた月形町などで一定の学び（情報収集）を積み重ねてきた。あわせて、強制労働にはその犠牲者の素性によって大きくは四つの区分があり、囚人労働とタコ労働のほか、アイヌ人強制労働と



太平洋戦争強制労働犠牲者慰霊碑

外国人強制労働があることも学んできている。^①
この強制労働の四区分に従うならば、釧路市の紫雲台墓地で慰霊されている犠牲者は外国人強制労働の犠牲者に当たる。その外国人とは、碑文によると、一九一〇（明治三四）年のいわゆる「日韓併合」後の国家体制のもと、「労務動員計画」（一九三九年）に基づき日本へと連行された朝鮮半島（碑文では「韓国」と「北朝鮮」を並記）の人々である。最終的にその数は総計約二〇万人にも及び、北海道には約七万人が連行されたという。しかもその時期は明治期ではなく、碑銘にもあると

おり、太平洋戦争の終戦時期にまで及ぶ昭和期である。北海道の近代史における強制労働の息の長さ、問題の根深さをあらためて実感させられる。

当時、釧根の地で築港や炭鉱での過酷な強制労働に服役し、犠牲となった韓国・北朝鮮の人々の数は、碑文によれば「約一〇〇名」に及ぶ。この犠牲者たちを慰霊するために、慰霊碑は一九七三（昭和四八）年に建立された。碑文には、国境を越えた民族の連帯と協力への呼び掛けとともに、戦争の悲劇を二度とくり返さないとする市民の誓いが刻まれている。

新聞報道によると、慰霊祭は二〇二三年八月二〇日に第五二回が開催されている。紫雲台墓地の慰霊碑は、強制労働という北海道開拓史の重大な史実を後世に伝える、貴重な場所の一つである。

3. 炭鉱展示館視察、釧路の石炭産業史を学ぶ

紫雲台墓地から数分で辿り着いた次の視察先は、旧太平洋炭礦の設置する「太平洋炭礦炭鉱展示館（釧路市桜ヶ岡三丁目）である。石炭鉱業は、漁業および製紙業と並び、釧路市の「三大基幹産業」の一つとされてきた産業分野である。今次視察では産業史にも積極的に目を向けたいと考え、その一環でまず、石炭産業の歴史に関する情報収集を目的に、この施設を訪れた。同館の展示資料などによれば、釧路の石炭産業の沿革は以下のようになる。

釧路地域で石炭産業が発展し得たのは、まずは何より、そもそもこの地に「釧路炭田」という道内屈指の巨大な炭田があるためで、釧路産石炭の存在は江戸時代から知られていたという。一八五五（安政二）年の函館開港以降は、同港に寄る外国船に供給される燃料として、釧路炭田での石炭採掘が開始されていた。

釧路炭田に近代的な炭鉱が開坑されたのは一八八七（明治二〇）年、安田財閥開坑の春島炭山が嚆矢である。この当時、前出の佐野孫右衛門の出願により始まった硫黄山（アトサスプリ）での硫黄の採掘に関わって、その生産・輸送のための燃料として、石炭ニーズが高まっていた。釧路集治監の囚人労働によって進められた硫黄山での硫黄生産は一八九六（明治二九）年をもって終了したが、釧路炭田で生産される石炭は、本州の工業地帯からのニーズもあつたことから、以後、釧路炭田全体での開発が明治三〇年代から本格化することになり、大正期、昭和の戦前・戦中期、戦後の経済復興期を経て、大手・中小の炭鉱が増加していった。

この間、木村組春採炭礦（前出の旧春島炭山を買収）と三井鉱山釧路炭鉱の二社が一九二〇（大正九）年に合併して誕生したのが太平洋炭礦株式会社である。同社は充足以降、採炭技術のイノベーションを積極的に進め、年当たり二〇〇万ト以上という生産を長年にわたって維持し、釧路の石炭鉱業の発展を支え続けてきた。

<付表2> 釧路炭田の主な炭鉱一覧（1960年代）

| 地域 | 炭鉱名 | 1960年代の状況 |
|-------|------|-----------|
| 尺別・音別 | 尺別 | 稼行中 |
| | 音別 | 稼行中 |
| 白糖・茶路 | 新白糖 | 稼行中 |
| | ラサ白糖 | 休閉山 |
| | 西白糖 | 休閉山 |
| | 茶路白糖 | 稼行中 |
| | 東垂 | 休閉山 |
| | 上茶路 | 稼行中 |
| | | |
| 庶路 | 庶路 | 稼行中 |
| | 加利庶 | 休閉山 |
| | 松野沢 | 稼行中 |
| | 神の沢 | 稼行中 |
| | 泊別 | 休閉山 |
| | | |
| 雄別 | 雄別 | 稼行中 |
| | 大曲 | 稼行中 |
| | 然別 | 稼行中 |
| | 日宝 | 休閉山 |
| | 大和 | 休閉山 |
| | 興進 | 休閉山 |
| | | |
| | | |

| | | |
|-----|------|-----|
| 釧路市 | 太平洋 | 稼行中 |
| | 栄和 | 稼行中 |
| | 毘沙門 | 稼行中 |
| 釧路町 | 東釧路 | 稼行中 |
| | 東別保 | 休閉山 |
| | 共栄 | 休閉山 |
| | 泰平 | 休閉山 |
| | 別保 | 休閉山 |
| | 新釧路 | 稼行中 |
| | 共和 | 休閉山 |
| | 跡永賀 | 休閉山 |
| | 明 | 休閉山 |
| | | |
| 厚岸町 | 新上尾幌 | 稼行中 |
| | 宝生 | 稼行中 |
| | 丸善青葉 | 稼行中 |
| | 八千代 | 稼行中 |
| | 新八千代 | 休閉山 |

稼行中 20
休閉山 16

※ 石川孝織著『釧路炭田 炭鉱と鉄路と【増補版】』4頁掲載の地図「釧路炭田の主な炭鉱」に基づき、2023年11月、正木作成。同地図は『道東地域鉱業開発振興計画調査報告書』（1961年）より作成されている。

釧路炭田の炭鉱数のピークは一九六〇（昭和三五）年、採炭量のピークは一九六七（昭和四二）年の三四四・六万ト、炭鉱労働者の数は最大で約五〇〇〇人にも上ったという。大手炭鉱としては、太平洋炭礦のほか、庶路炭鉱等の明治鉱業社、雄別・尺別の雄別炭鉱社などが知られる。

くわえて、炭鉱開発の進展は、山間や内陸部に位置する炭鉱から、積出港の機能を担う釧路港へ炭鉱社の炭鉱も二〇〇二年一月をもって閉山となり、以降、今日に至るまで、後継の釧路コールマイン社が国内唯一の石炭生産（年間二五万ト、二〇二三年一月現在）を継承するとともに、政府による中国やベトナムなどアジア産炭国への技術移転事業として、研修生の受け入れや派遣による研修も実施している。

展示館は地上一階建ての施設だが、地下階がある。

石炭を輸送する手段として、炭鉱会社自身による鉄道の整備を後押しし、これもその後の釧路市の発展を支える原動力の一つとなっていく。鉄道については次節で再度触れる。

釧路の石炭産業の衰退は最盛期の裏で始まっており、一九六〇年代以降、石油へのエネルギーシフトの影響などを受け、炭鉱の閉山が徐々に進み始めた。一九七〇（昭和四五）年に雄別や尺別といった大手炭鉱が相次いで閉山すると、以降は太平洋炭礦一社だけが残ることになる。その太平洋



太平洋炭礦 炭鉱展示館

4. 市立博物館再訪、道東鉄道史に関する企画展を観覧

炭鉱展示館を去ると、春採湖の東側をぐるりと北上し、湖北側の畔、春採公園内の「釧路市立博物館」（釧路市春湖台）へ向かった。前回視察の際にも一度訪れていたが、十分な観覧時間を確保できなかったため、今回再訪することにした。

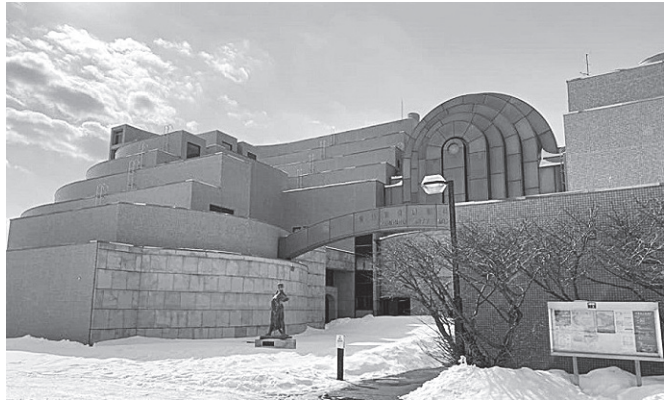
地下には坑道の一部が再現されており、巨大な掘削機や坑内機関車なども展示されている。

| | 軌道名 | 開業年 | 区間（最長時） | 距離 | 全線区廃止年 |
|----|-------------------------|-------|-----------------------------------|--------|--------|
| 1 | 殖民軌道根室線 | 1924年 | 厚床－中標津－三本木 | 80.0km | 1933年 |
| 2 | 殖民軌道計根別線 | 1926年 | 中標別－計根別 | 15.6km | 1937年 |
| 3 | 殖民軌道鶴居線 → 鶴居村営軌道 | 1927年 | 雪裡線：新富士－中雪裡 | 28.8km | 1968年 |
| | | | 幌呂支線：下幌呂－新幌呂 | 19.3km | |
| 4 | 殖民軌道茶内線・若松線 → 浜中町営軌道 | 1927年 | 茶内線：茶内－西門朱別 | 13.0km | 1972年 |
| | | | 茶内支線：秩父内－開南 | 13.4km | |
| | | | 若松線：中茶内－別寒辺牛 | 7.8km | |
| 5 | 殖民軌道標茶線 | 1927年 | 標茶－計根別 | 38.9km | 1936年 |
| 6 | 殖民軌道西別線 | 1929年 | 西別－広野－春日－上春別 | 40.5km | 1956年 |
| 7 | 殖民軌道久著呂線 | 1929年 | 塘路－上久著呂 | 28.9km | 1965年 |
| 8 | 殖民軌道弟子屈線 | 1933年 | 弟子屈－虹別 | 22.0km | 1945年 |
| 9 | 殖民軌道上春別線 | 1933年 | 上西春別－西春別－春日 | 14.2km | 1949年 |
| | 殖民軌道中春別線 | 1936年 | 春別－上春別－春日 | 17.4km | |
| | 殖民軌道春別線 | 1937年 | 上西春別－春日－春別 | 31.6km | |
| 10 | 殖民軌道仁々志別線 | 1937年 | 稔禰平－仁々志別 | 12.2km | 1964年 |
| 11 | 殖民軌道茶安別線 | 1938年 | 標茶－茶安別 | 7.1km | 1947年 |
| 12 | 殖民軌道阿歴内線 | 1938年 | 塘路－阿歴内 | 12.7km | 1961年 |
| 13 | 殖民軌道虹別線 | 1938年 | 西春別－虹別 | 9.7km | 1954年 |
| 14 | 殖民軌道養老牛線 | 1938年 | 計根別－養老牛 | 11.1km | 1961年 |
| 15 | 簡易軌道標茶線 → 標茶町営軌道 | 1955年 | 標茶線：標茶駅前－上オソバツ | 24.1km | 1971年 |
| | | | 沼幌支線：中オソバツ－沼幌 | 6.5km | |
| 16 | 簡易軌道風蓮線 → 別海村営軌道 | 1933年 | 【馬力線】 厚床－上風蓮5線9号 （上記根室線の一部の独立） | 15.2km | 1964年 |
| | | 1963年 | 【動力線】 奥行臼－上風蓮 | 13.0km | 1971年 |

| | 鐵道名 | 開業年 | 區間（最長時） | 距離 | 全線区廃止年 |
|---|--------------------------|-------|---------------|--------|--------|
| 1 | 釧路臨港鐵道 → 太平洋石炭販売輸送臨港線 | 1925年 | 入舟町－春採－東釧路－城山 | 11.5km | 2019年 |
| 2 | 雄別炭鉱鐵道 | 1924年 | 釧路－雄別炭山 | 44.1km | 1970年 |
| 3 | 尺別鐵道 | 1920年 | 社尺別－尺別炭山 | 11.7km | 1970年 |

示しており、歴史に関するフロアでは、釧路市の開拓・近代化と発展の歴史（近世・近現代史、産業史）のほか、釧根エリアのアイヌ民族の歴史や文化についても膨大な資料・史料を観覧することができる。今回は特に、釧根エリアにおけるアイ

北海道自治研究 2023年11月 (No.658)



釧路市立博物館



釧路市立博物館2階 「釧路の近世・近代」の展示

とになった。この間、軌道の中には、後にガソリン機関車などを導入し、独自に動力化するところも現れる一方、一九六〇年代まで馬力線を運行し続けた軌道もあるとのこと。戦後の交通インフラの整備の進展により役割を終え、一九七二（昭和四七）年の浜中町営軌道の廃止をもって、道東の簡易軌道は全て姿を消した。¹⁵⁾

なお、市立博物館について付言すれば、館発行の書籍の充実ぶりには、訪れる度に驚かされる。これらの書籍は、当研究会としても資料収集の一環で、前回訪問時は鉄道や炭鉱に関する書籍を計

六冊、今回も館のガイドブックなど二冊を購入した。本稿の執筆にも大いに参考にさせていたであり、一言紹介しておきたい。

5. 釧路市と鳥取町の行政史を振り返る

市立博物館の観覧後、遅めの昼食休憩を経て、午後からの巡察を再開した。幣舞橋を再度渡り、国道三八号を道なりに北西へ。次の目的地は、新釧路川を渡った先に位置する鳥取地区である。新釧路川にまたがる鳥取橋を渡った西側、橋か

ら程なくの場所に、「鳥取五号公園」（釧路市鳥取大通九丁目）という公園がある。この園内の一角に、二つの重厚な石碑が建立されている。「釧路市・鳥取町合併記念碑」である。碑銘にあるとおり、この一帯にはかつて「鳥取町」という自治体が存在し、一九四九（昭和二四）年一月一日をもって釧路市と合併したことが碑文には記されている。

現在の釧路市の開基は、一八七二（明治五年）に釧路郡に置かれた五村の一つ「釧路村」に遡る。発足当初の釧路村の所在地は現在の橋南地区に相当する。釧路村はその後、隣接地への米町の新設（一八七五年）、真砂町の分立（一八八二年）、幣舞・浦見・洲崎三町の分立（一八八八年）などを経て、一九〇〇（明治三三）年の「北海道一級町村制」の適用により「釧路町」に変わった。この一級町村としての釧路町は、まず一九二〇（大正九年）七月一日の「北海道区制」施行により「釧路区」へ移行し、さらに一九二二（大正一一）年八月一日の「市制」施行により現在につながる「釧路市」へと変わっている。釧路市と鳥取町との合併は、前述のとおり一九四九（昭和二四）一月の実施。釧路市が関わる合併としてこれに続くのが二〇〇五（平成一七）年一月一日実施の阿寒町・音別町との三市町合併であり、これが現在（二〇二三年一月現在）の釧路市の姿になる。¹⁶⁾

なお、釧路市に隣接する現行の釧路町は、前出の一級町村としての釧路町とは別の団体である。この一級町村としての釧路町が「北海道区制」の



釧路市・鳥取町合併記念碑

施行に先だって一部地域を分立させており、これが新たに釧路村とされた。この釧路村が一九八〇（昭和五五）年に「町制」施行して現在の釧路町となり、今日に至っている。^①

一方、鳥取町は、一八八四（明治一七）年開村の「鳥取村」に始まり、碑文によれば、「北海道二級町村制」適用（一九二三／大正二二年四月、「北海道一級町村制」適用（一九三三／昭和八年五月）を経て、一九四三（昭和一八）年に「町制」施行になっている。これが一九四七（昭和二二）年五月三日以降は「地方自治法」のもと普通地方

< 付表5 > 釧路市と鳥取町の沿革

| 年 | 釧路市 | 鳥取町 | 北海道 |
|------|---|--|---|
| 1869 | | | 7月8日 開拓使設置 8月15日 北海道設置、道内に11国86郡設置 |
| 1872 | 釧路国釧路郡に釧路村を含む5村設置 | | |
| 1882 | | | 2月8日 開拓使廃止に伴い、札幌県・函館県・根室県の三県設置 |
| 1884 | | 6月9日 鳥取士族の移住者第1陣が根室県に到着、移住先として、釧路村々の一部を分割し、鳥取村開村 | |
| 1885 | | 5月14日 鳥取士族の移住者第2陣が到着 | |
| 1886 | | | 1月26日 三県を廃止し、内務省北海道庁設置 |
| 1899 | | | 10月1日 「北海道区制」、「北海道一級町村制」、「北海道二級町村制」施行 |
| 1900 | 7月1日 釧路村に「北海道一級町村制」施行、釧路町が発足 | | |
| 1920 | 6月27日 釧路町から釧路村（後の現・釧路町）分立 7月1日 「北海道区制」に基づく釧路区が発足 | | |
| 1922 | 8月1日 釧路区に市制施行、釧路市が発足 | | |
| 1923 | | 4月 鳥取村に「北海道二級町村制」施行 | |
| 1933 | | 5月1日 鳥取村に「北海道一級町村制」施行 | |
| 1943 | | 6月9日 鳥取村に町制施行、鳥取町発足 | 6月1日 「北海道一級町村制」、「北海道二級町村制」廃止 |
| 1947 | 5月3日 釧路市、普通地方公共団体の市町村に位置づけ | 5月3日 鳥取町、普通地方公共団体の市町村に位置づけ | 5月3日 「日本国憲法」、「地方自治法」施行、北海道は普通地方公共団体の都道府県に位置づけ |
| 1949 | 10月10日 釧路市、鳥取町および白糠町の一部と合併 | 10月10日 鳥取町、釧路市と合併し廃止 | |
| 2005 | 10月11日 釧路市、阿寒町・音別町と合併 | | |
| 2022 | 釧路市、市制施行100周年 | | |

※ 『釧路市統合年表』、『釧路のあゆみと産業』に基づき、2023年11月、正木作成。

公共団体として存在していたことになるが、二年半ほどで釧路市と合併し、廃止されている。

二市町が合併するに至った理由は、当時約四七平方kmと面積が狭く、都市計画をつくることもままならない状況にあった釧路市と、約一三六平方kmと釧路市の三倍近い面積を持ち、製紙工場等の集積もありながらも、港を持たず、農産・畜産加工品の搬出も、工業立地の拡充も望めない鳥取町が、お互いの抱える問題を解決するためであったとされる¹⁸⁾。合併時の人口は、旧釧路市が七万一千三百一人、旧鳥取町が一万三四九人、計八万五八〇人¹⁹⁾。その後、合併が起爆剤となったかのように、釧路市の人口はさらに増加を続け、一九六五（昭和四〇）年に一〇万人を突破し、一九八四（昭和五九）年にはこれまでのピーク人口である約二一・八万人を記録した²⁰⁾。合併記念碑が建つ鳥取五号公園は、かつて旧鳥取町役場が立地した敷地跡に他ならない²¹⁾。

6. 鳥取百年館再訪、鳥取土族の釧路移住について学ぶ

鳥取村という村名は、移住者の出身地に由来する。この移住者とは、鳥取県から来た土族たち、「鳥取土族」を指す。鳥取土族を受け入れるために、釧路村の一部を分割して設置され、出身地の名を付されたのが鳥取村である。

移住に至る背景には、いくつかの時代状況があ

るとされる。一つは、一八七二（明治四）年秋に始まる府県統合の急速な進展の中で、一八七六（明治九）年に鳥取県が一度廃止（島根県へ併合）され、その後に始まる鳥取県再置運動の中で、不満を高めた一部土族の暴力化が進んだこと。第二に、一八七五（明治八）年の俸禄制度の廃止とも相まって、鳥取土族の大部分で窮乏が深刻化したことである。こうしたなかで、当時参議の職にあった山県有朋による現地視察が行われ、その際に鳥取県再置の条件として提示されたことの一つが北海道への土族移住であった²²⁾。

この実施のために「移住土族取扱規則」（農商務省達第九号）が一八八三（明治一六）年に制定され、釧路もその適用を受ける地域の一つになった²³⁾。同規則に基づく鳥取から釧路への移住者は、第一団の四一戸（二一七人）が一八八四年六月に、第二団の六四戸（三〇六人）が一八八五年五月に到着している²⁴⁾。五〇〇人超という規模での移住は、当時まだ小さな漁村であった釧路村のあり方に大きなインパクトを与えたものと推察される。

鳥取土族の釧路移住は、明治期以降の北海道開拓に見られた土族開拓あるいは土族授産の一形態だが、一つの特長性がある。移住が始まる一八八四（明治一七）年は、屯田兵制度導入後の時期であったにもかかわらず、その適用を受けていないことである。これは当時の国および北海道の行政体制の事情による。鳥取からの移住土族を受け入れたのは根室県釧路村であり、「三県一局時代」

と呼ばれるこの時期は、一八八二（明治一五）年二月の開拓使の廃止に伴い、同制度の所管が開拓使から陸軍省に移管されたばかりであったため、屯田兵の募集がいったん停止されていたという²⁵⁾。

前出「移住土族取扱規則」が農商務省の所管であるのもそのためである。同規則の適用を受けて釧路に移住した鳥取土族たちは、移住先で保護され、住居、農機具、農耕馬などは貸与されたほか、米、醤油、味噌、塩、作付け用種子などは給与されたという²⁶⁾。なお、同規則は三県一局時代の終焉とも失効になり、釧路では本件が最初で最後の例になったとされる。鳥取土族の釧路移住は、鳥取県の廃止・再置と、北海道開拓使の廃止に伴う屯田兵の一時募集停止、北海道三県一局時代における行政体制の特長性などを時代背景として、明治期初頭の土族開拓とも、屯田兵制度の前期を担った土族屯田とも異なる、もう一つの土族開拓の姿を表している。

鳥取土族の釧路移住の事績を後世に伝え、顕彰する碑は釧路市内の各所に見られる。あわせて、「鳥取神社」（釧路市鳥取大通四丁目）境内に設置の「鳥取百年館」ほど、本件に関する資料・史料を豊富に展示している施設は他にない。

筆者が同館の存在を知ったのは、前回視察時に実際に訪れたときである。視察先の下調べは、主に各自自治体のウェブサイトに掲載されている文化財・史跡情報や観光情報などの閲覧を通じて行いが、ここは下調べでは発見できなかった施設で



鳥取百年館

あった。現地に行つて初めてわかることは多々あるというのは重々承知しながらも、このときほど下調べの限界を感じたことはなかった。初訪問の際も展示資料の充実ぶりには大いに驚かされたが、予期せぬ発見であつたが故に十分な観覧時間もなく、再訪の機会をうかがわざるを得なかったところ、今回念願叶つての再訪となつた。

鳥取神社の由緒には「移住者総意のもと、明治二四年四月二三日、島根県出雲大社より御祭神「大國主大神」の御分霊を拝請して鳥取神社を創祀」とある。その境内、社務所に隣接して建つ城郭の

ごとき建物こそ「鳥取百年館」である。一九八四（昭和五九）年、名称にもあるとおり、鳥取士族移住一〇〇年を記念し、彼らの出身地にかつて存在した鳥取城をモデルとして建てられた。三階建ての館内には、士族移住者の遺品、鳥取市寄贈の甲冑、鳥取藩主池田家の家宝など、資料約一六〇〇点が展示されており、移住者たちの開拓期の苦難や、鳥取村から鳥取町に至る歴史、住民の生活史を伝えている。

なお、JR 釧路駅の北口から北西へ向かう道を共栄新橋大通という。始点付近に碑が置かれていることからもうかがえるように、この道の周辺地区こそが鳥取士族たちの最初の入植地であつた。共栄には釧路市民と鳥取村民が共に栄えていくことへの願いが込められているという。釧路市と鳥取市は一九六三（昭和三八）年に姉妹都市の提携を行い、その絆は今日も続いている。

鳥取神社を去ると、国道三八号をさらに西へ移動し、辿り着いたのは、JR 大楽毛駅前のロータリー（釧路市大楽毛五丁目）。予定外ながら、岩崎さんの計らいでロータリー内の一角に置かれている「日本釧路種」という馬の銅像に案内された。大楽毛地区は、明治期から一九六〇年代まで、開拓農耕馬や軍馬への需要の高まりを背景に、馬市の開催場所として活況を呈していた時期がある。銅像に刻まれた「日本釧路種」はこの地で生産されていた品種名であり、すでに絶滅している。³⁰⁾今は失われた釧路のもう一つの顔を最後に紹介さ

れ、今回の巡察を終えることになった。

7. まとめに代えて

前回視察での大きな心残りを解消するために実施した今回の補足視察は、「釧路の発祥」に最も強い関心を寄せ、かつての中心地であつた橋南地区や、かつては別の自治体であつた鳥取地区の歴史に関する情報収集に努めたことが最大の特徴であつたと振り返る。

今次視察を通じ、この地は元々はクスリと呼ばれていたアイヌ民族の要地であり、近世期に場所請負制度の場所や幕領時代の要地として発展へのきっかけを得た後、続く明治期以降、北海道設置に伴いクスリから釧路に正式に言い換えられるとともに、今日の釧路市の開基をなす釧路村が設置されるに至る流れが見えた。その後、釧路村から釧路町、釧路区を経て、一九二二（大正一一）年に発足した釧路市は、急速な人口減少や基幹産業の衰退といった苦難に直面しながらも、二〇二二（令和四）年に市制一〇〇年の節目を迎えるに至っている。

一方、明治期の鳥取士族の移住によって創設され、戦後までもなく釧路市と合併する旧鳥取町の存在が、今日の釧路市を形成していく上で極めて重要な役割を担ったという事実とその理由を知り得たことも、今回の大きな成果の一つである。鳥取からの移住士族たちによる釧路開拓の事績は、「互

いの弱点を補い合い、さらなる飛躍を可能にさせた」と評される二市町合併を経て、二〇万都市釧路市を実現していく土台をつくったと言える。

関係して特に興味深かったのが、鳥取県再置運動への対応という鳥取土族の釧路移住の背景と、入植形態の特殊性である。その特殊性は専ら、受け入れ側の北海道の当時の行政体制が、開拓使から三県一局体制への移行期にあったことに由来していた。明治初期の土族開拓とも土族屯田とも異なる土族移住のかたちを知り、開拓主体の多様性に関する知見が広がったと考えている。

このほか、産業史により積極的に目を向けた今回、炭鉱展示館や市立博物館といった施設を巡り、釧路炭田の炭鉱史と道東の鉄道史を概観する機会を得られた。これら施設での情報収集を通じて、明治期以降の釧路圏域の地域経済を支えた石炭産業の存在感の大きさや、釧路市あるいは釧路港を圏域の結節点とする産業と交通インフラの関係などが、今日の釧路市の形成にどのように作用してきたか、甚だ不十分ながらもほの見た気がした。産業史の重要性と、その情報収集の必要性をあらためて自覚させられたところであり、今回はほとんど手の届かなかった他の産業分野（漁業、林業、製紙業、馬産業など）の各歴史、鉄道・港湾・道路などの交通インフラの整備史、それらと自治体の発展の関係などに関する探究は、引き続き研究会としてのテーマになるう。

研究会では今後も引き続き、道内各地での現地

視察や学習会を通じ、北海道の近現代史に関する情報収集を積極的に進め、多角的な視点に立った情報の整理に取り組んでいく所存である。

【付記】

本稿の執筆に当たっては、現地視察時のガイドから、内容の確認に至るまで、岩崎守男さんに多大なご協力を賜りました。お名前を記し、謝意を表します。

【注】

- (1) 二〇一九年発足。二〇二三年一月現在のメンバーは、竹中英泰（旭川大学名誉教授／当研究所理事／当研究会主査）、押谷一（酪農学園大学教授／当研究所理事）、三輪修彪（北海道労働文化協会理事／当研究所元専務理事）、正木浩司（当研究所研究員／当研究会事務局）。本文でも後述するとおり、本稿で扱う第三回現地視察補足視察には事務局の正木（筆者）一人が参加し、本稿の執筆も担当した。
- (2) 二〇二一年一月三日～一六日に実施。訪問した市町村は、訪問順に、根室市、厚岸町、標茶町、釧路市阿寒町、鶴居村、釧路市中心部（旧釧路市区域）。レポートは本誌二〇二二年三月号（第六三八号）に掲載。
- (3) 注2にもあるとおり、ここでの釧路市中心部とは、二〇〇五年の三市町合併以前の旧釧路市区域を指す。
- (4) 戸田ほか（二〇一四）三頁によると、「釧路」の語源とされるアイヌ語としては、クスリ（「薬」、「温泉」の意味）のほか、クシユル（「交通の要路」の意味）、クツチャロ（「咽頭」の意味）があるという。
- (5) 谷本（二〇二〇）九～一〇頁。
- (6) 釧路市立博物館の展示資料「クスリ場所の範囲」による。
- (7) 『釧路市統合年表』四頁。
- (8) 同右。
- (9) 同右。
- (10) 戸田ほか（二〇一四）三頁。
- (11) 強制労働の四区分は、北網圏北見文化センター（北見市公園町一）の展示「北海道開拓と強制労働」に基づいている。詳細は正木（二〇二一）二四～二五頁を参照されたい。
- (12) 以下の本節の記述は、炭鉱展示館展示の「釧路炭田」という説明パネル、釧路市立博物館の無料配付資料「釧路炭田の歴史」、石川（二〇二〇）を参照した。
- (13) 釧路コールマイン社ウェブサイト掲載の「研修事業」を参照した。
- (14) 釧路市立博物館（二〇二二）七八頁。
- (15) 本段落の記述は、石川ほか（二〇一八）一八～二二頁を参照した。
- (16) 本段落の記述は、戸田ほか（二〇一四）九～一〇頁を参照した。
- (17) 本段落の記述は、釧路町ウェブサイト掲載の「町のあゆみ」を参照した。

- (18) 釧路市地域史料室ほか(二〇〇三)四〇～四一頁。
(19) 同右。

- (20) 戸田ほか(二〇一四)一七頁。

- (21) 釧路市地域史料室ほか(二〇〇三)二八頁。

- (22) 本段落の記述は、高嶋(二〇二一)三七～三九頁を参照した。

- (23) 釧路市地域史料室ほか(二〇〇三)一四頁。

- (24) 釧路市地域史料室ほか(二〇〇三)一六頁、鳥取百年館展示の年表「鳥取町のあゆみ 略年表」。

- (25) 高嶋(二〇二一)三九頁。

- (26) 釧路市地域史料室ほか(二〇〇三)一六頁。

- (27) 管見の限りでは、JR釧路駅北側ロータリーから徒歩数分の場所に位置する「鳥取県土族移住之地碑」(共栄大通一丁目)と、鳥取地区にある「鳥取県土族移住之地碑」(鳥取大通九丁目)の二カ所。

- (28) 鳥取神社ウェブサイト掲載の説明文を参照した。

- (29) 釧路市地域史料室ほか(二〇〇三)四〇頁。

- (30) 『北海道新聞』二〇一三年三月二日付朝刊(釧路版)掲載記事「釧根まち物語 第一部①日本釧路種」のほか、戸田ほか(二〇一四)三九～四〇頁も参照した。

○頁も参照した。

【参考文献・資料】

- ・ 石川孝織『阿寒国立公園と硫黄鉱山』釧路市立博物館、二〇一五年三月
- ・ 石川孝織『釧路炭田 炭鉱と鉄路と【増補版】』釧路市立博物館友の会、二〇二〇年二月
- ・ 石川孝織ほか『釧路・根室の簡易軌道【増補改訂

版』釧路市立博物館、二〇一八年十一月

・ 釧路市地域史料室・釧路市地域史研究会編『釧路市統合年表』釧路市、二〇〇六年一〇月

・ 釧路市地域史料室・鳥取市歴史博物館編『鳥取土族の開拓移住―鳥取・釧路交流史』釧路市地域史料室・鳥取市歴史博物館、二〇〇三年四月

・ 釧路市立博物館編『釧路市立博物館展示ガイドブック』釧路市立博物館、二〇二二年三月

・ 高嶋弘志『古文書に見る近代の釧路地方』釧路市教育委員会、二〇二二年三月

・ 田中和夫『北海道の鉄道』北海道新聞社、二〇〇一年二月

・ 谷本晃久『北海道開拓の光と影―「開拓」と「地方自治」をめぐる』(『北海道自治研究』第六一四号所収二～一五頁) 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二〇年三月

・ 戸田恭司ほか『釧路のあゆみと産業』釧路市立博物館、二〇一四年三月

・ 北海道新聞社編『くしろ百年』釧路市、一九六九年八月

・ 正木浩司「北海道近現代史研究会・第二回現地視察レポート―北見市・佐呂間町・網走市を訪ねて」(『北海道自治研究』第六二六号所収二〇～三九頁)

・ 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二一年三月

・ 正木浩司「北海道近現代史研究会・第三回現地視察レポート―根室市・厚岸町・標茶町・釧路市を訪ねて」(『北海道自治研究』第六三八号所収一二～二

四頁) 公益社団法人北海道地方自治研究所、二〇二二年三月

【参照ウェブサイト】

- ・ 釧路コールマイン株式会社
<http://www.k-coal.co.jp/>
- ・ 釧路市立博物館
<https://www.city.kushiro.lg.jp/museum/>
- ・ 釧路市立博物館の炭鉱
<https://www.city.kushiro.lg.jp/sangyou/sanshen/1006425/1006427.html>
- ・ 釧路市立博物館【姉妹都市】
<https://www.city.kushiro.lg.jp/machi/kouyuu/1005897/1011468.html>
- ・ 釧路町立博物館のあゆみ
<http://www.town.kushiro.lg.jp/introduction/ayumi.html>
- ・ 釧路國一之宮 厳島神社
<http://kushiro-itsukushimajinja.com/>
- ・ 国土交通省北海道開発局釧路港
https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/k/kou_kei/ud49g700000063vr.html
- ・ 鳥取神社
<https://www.tottorijinja.com/>

※ 最終閲覧は、二〇二三年一月二五日。

へまきき、こうじ・公益社団法人北海道地方自治研究所研究員